

# 『宇治拾遺物語』研究

——「ふしまろぶ」をめぐるつて——

菅原 沙也花

## はじめに

『宇治拾遺物語』（以下『宇治拾遺』）巻一には、各話ごとに連関が存在する。『宇治拾遺』の研究史において、はじめてこの連関について言及したのは、益田勝実氏である。<sup>注1</sup> 益田氏は、『宇治拾遺』の編集方式を雑纂ではないとし、第一話から第八話を取り上げ、各話の連関性を提示している。連関から読み取れる作者の編集意識を見出した論文であり、これを契機に、各話の連関を指摘する論文が多く発表されている。<sup>注2</sup> 『宇治拾遺』を読み解く上で、連関性を明確に見出した益田氏の論文は非常に重要であり、『宇治拾遺』研究において常に立ち返るべきものと言える。

その後、『宇治拾遺』研究において、益田氏の論を継承し、かつ発展させた一人が、荒木浩氏である。荒木氏は各話の語彙を詳細に検討し、その連鎖について指摘した上で、『宇治拾遺』を以下の

ように読むべきと提示している。

こうした表現の瑣末な類似は、右に見た様に、必ずしも厳密に一話一話隣り合う説話に限られた連鎖なのではなくして、書物の「次第」の進行に沿って、ゆるやかに相互を結びつけている。従って、かくの如き、説話の主題とはひとまず無関係な表現の類似は、ひと度その気になって探すならば、何も近隣の説話同士に限ったことでは無いことがわかってくる。<sup>注3</sup>

従来、隣接する説話に見出すことが主であったが、荒木氏は各話の語彙の調査から、物語を横断する連想の契機が多く存在することを指摘した。氏は、各話の語彙から見出された連関に基づいた『宇治拾遺』の読みについて次のように述べている。

隣り合う説話相互の連続と、いわば同一の次元上に物語中に散在する説話同士の結合、連絡が有るならば、物語の有機的結合を解体して、読者は、宇治拾遺を、どこからでも、ど

のようにならなくても、読んで構わないということにならないか。換言すれば「次第不同」に読み進めていくことが、作品から要請されているのだと。<sup>注4</sup>

本稿は右の荒木氏の論を試行する立場に立ち、「ふしまろぶ」という語彙に注目して、新たな読みの可能性を私見として提示することを旨とする。

『宇治拾遺』で「ふしまろぶ」は六例使用されており、

第六話「中納言師時、法師の玉莖検知の事」

第七話「竜門の聖、鹿に代らんとする事」

第一六話「尼、地藏見奉る事」

第七五話「同清仲の事」

卷一〇八話「越前敦賀の女、観音助け給ふ事」

卷一一三話「博打の子、聾人の事」

右記の各話に登場する。「ふしまろぶ」を一つの語脈であると考え、以下、順を追って考察していきたい。

後に詳しく扱うが、一例としてまず第六話と第七話を見てみよう。いかさまな聖が登場する第六話と、高德の聖が登場する第七話は、一見正反対の性格を有する話のように読み取れる。読み手は、まず第六話から第七話という次第で読み進めていく。その際、第六話の「ふしまろぶ」が伏線となり、読み手は第七話を懷疑的

な視点から読まざるを得なくなる。読み手は第七話での懷疑を解消すべく、第六話に立ち戻る、あるいは語脈の繋がりを追うべく他の話を見つげようとする。「ふしまろぶ」が『宇治拾遺』読解における一つの語脈であるならば、読み手は物語を何度も繰り返して立ち戻り、読み進めていくこととなる。

ここで本話に入る前に、「ふしまろぶ」の語義について確認しておこう。「ふしまろぶ」は、「転げ回る。転がり伏す。極度の喜び、または悲しみを表す」<sup>注5</sup>と定義されており、『源氏物語』（以下『源氏』）や『今昔物語集』（以下『今昔』）等に使用例がみられる。

例えば、『源氏』において「ふしまろぶ」という語は極度の悲しみを表現する語として用いられている。『源氏』で使用される「ふしまろぶ」の語義は一貫しており、使用される状況や表現される感情に殆ど差異はない。深い嘆きや悲しみと共に現われる身体的表現として用いられている。<sup>注6</sup>

続いて『宇治拾遺』と同文的同話を多く有する『今昔』を見てみよう。『今昔』では、十七例「ふしまろぶ」の用例がみられる。この十七例は大きく二つに区分することができる。すでに述べたように「ふしまろぶ」は身体的表現であり、『源氏』では「深い悲嘆」を表現していた。『今昔』において、「ふしまろぶ」は基本的に「泣く」「喜ぶ」の二つの感情表現を伴っている。<sup>注7</sup>「ふしまろぶ」

に伴う「喜び」は『源氏』ではみられない用例ではあるが、ある種の感情を誇張的に表現するという点では共通している。

「ふしまろぶ」動作主、および周囲の人間は極限の状態の中に存在する。加えて、動作主に関して、基本的に高貴な者達は「ふしまろぶ」ことはなく、多くは身分の低い者達が「ふしまろぶ」ということが指摘できる。<sup>注8</sup>これは、誇張的表現である。「ふしまろぶ」という身体所作が、下賤な振る舞いであることの現れであると思われる。『宇治拾遺』でも、身分の低い者達が動作主、ひいては物語の中心となり、「ふしまろび」ゆくこととなる。

以上、「ふしまろぶ」の用例を概観してきたが、先行文学にはそもそも用例が少なく、『宇治拾遺』における「ふしまろぶ」の使用例の出現は、身分の低い者達が文学作品の中で描かれるようになったという変化の現れでもあろう。

先行文学での「ふしまろぶ」が「極度の悲しみを表現する」語であることや「誇張的表現」であることを前提に、以下『宇治拾遺』各話をひもといていきたい。

—

まず「ふしまろぶ」の初出である第六話「中納言師時、法師の玉莖検知の事」から検討する。以下、本文の引用は、すべて『新

編日本古典文学全集』による。

中納言師時の元に、墨染めの短い衣と袈裟をまとった法師が現れる。法師は自身を「煩惱を切り捨てた聖」だと称し、その証として性が無いと嘯く。怪しんだ中納言は、人を呼び真実を確かめさせようとする。以下、真実につながる決定的な場面を載せておこう。

さて小侍の十二三ばかりなるがあるを召し出でて、「あの法師の股の上を手を上げて上げ下しさせ」とのたまへば、そのままにふくらかなる手して上げ下しさせる。とばかりある程に、この聖まのしをして、「今はさておはせ」といひけるを、中納言、「よげになりにたり。たださせ。それそれ」とありければ、聖、「さま悪しく候ふ。今はさて」といふを、あやにくにさすり伏せける程に、毛の中より松茸の大きやかなる物のふらふらと出でて来て、腹にすはすはと打ちつけたり。中納言を始めて、そこら集ひたる者ども諸声に笑ふ。聖も手を打ちてふしまろび笑ひけり。

はやう、まめやかものを下の袋へひねり入れて、続飯にて毛を取りつけて、さりげなくして人を謀りて物を乞はんとしたりけるなり。狂惑の法師にてありける。

第五話と同じく法師のいかさまが露見するという、滑稽な失敗

談である。話中で「ふしまろぶ」のは、聖法師である。聖法師のいかさまが露呈<sup>注9</sup>し、あまりの滑稽さに周囲が笑いだしたところ、聖本人も「ふしまろび」笑うのである。第六話で「ふしまろぶ」に呼応する感情は、笑いである。いつたい、感情が極限の状態にある時、しばしば誇張的表現を伴い表現されることがある。「あしずり」などが広く知られる例であろう。「ふしまろぶ」について、極めて深い悲嘆を『源氏』は表現していたが、『宇治拾遺』は場に起こる笑いの渦を表現しているのだ。

『宇治拾遺』の「ふしまろぶ」の始発は第六話であり、以後「ふしまろぶ」という鍵語が登場すると、読み手はこの滑稽な笑いに立ち戻らざるを得なくなる。第六話は、性に纏わる下卑た笑話である。この話が読み手に与える印象は非常に強く、読み手の脳裏に強く浮かぶことは明らかである。「ふしまろぶ」を語脈とする連関は、常にこの第六話に立ち戻ることになる。

## 二

続く第七話「竜門の聖、鹿に代らんとする事」は第六話と隣接している。

大和国の竜門に一人の聖がいた。聖には親しい男がいたが、その男は狩猟を生業としていた。聖は男の殺生を辞めさせるべく自

らの命をかけ、鹿のふりをして男の前に現われる。鹿の目の様子が普段と違っていたことから、男は鹿の正体に気がつき射ることはなかった。男は聖になぜ鹿のふりをしているのかと問うことになる。

「こはいかに、かくてはおはしますぞ」といへば、ほろほろと泣きて、「わ主が制する事を聞かず、いたくこの鹿を殺す。我鹿に代りて殺されなば、さりともしはとどまりなんと思へば、かくて射られんとして居るなり。口惜しう射ざりつ」とのたまふに、この男ふしまろび泣きて、「かくまで思しける事を、あながちに侍りける事」とて、そこにて刀を抜きて、弓たち切り、胡籙みな折りくだきて髻切りて、やがて聖に具して法師になりて、聖のおはしけるが限り聖に使はれて、聖失せ給ひければ、またそこにぞ行ひてゐたりけるとなん。

猟師の男は、聖の滅私の行いに感動し「ふしまろび」泣き、発心に至る。一見すると、感動的な発心譚として読むことの出来る話であり、従来、聖の無私の行為からなる仏教説話であると評されてきた。例えば田口和夫氏は「猟師は、聖の訴えたかった鹿猟という殺生の罪のおそろしさを知ったのではない。命を捨てても自分に訴えたいという聖の心に打たれたのである」と評しており、高徳の聖の行いこそが猟師を救ったと見ている。<sup>注10</sup>

高德の聖が身を挺して、狩猟を生業とする男の殺生をやめさせる。滅私の聖の行いは、信仰に生きる者としての高潔さがある。

死をも覚悟して、他者の殺生をやめさせようとする聖の行為は読み手の涙を誘おう。しかし、この話には不自然な点もいくつか存在する。まず法師の行為に関して、殺生をやめさせるためとはいえ、鹿に擬態までするのはいささか不自然であろう。また猟師の男の発心に關して、あまりにも急に発心に至るため、唐突な展開とは言えまいか。そして、如上の不自然さに「ふしまろぶ」が關わっており、第六話と第七話を結ぶ連関がそこに存在すると思われる。すなわち、第七話を讀む際に、前話の「ふしまろぶ」様が脳裏に浮かぶ讀み手は、第七話の聖の功德に泣く男から、無意識に滑稽さを感じ取ってしまうのではないだろうか。

さらに滑稽さという点だけではなく、「誇張的表現」という側面から、発心にいたる男の「狂心性」を讀み取ることもできよう。

ここでの「狂心性」とは、理性を失ひたすら聖や仏を信じることを指す。第六話で使用された「ふしまろぶ」を讀者は思い出し、高德の聖の話が前話の影響を受けて矮小化されていくのだ。

加えて、第六話、七話ともに、事実が明るみになるといふ共通性がある。第六話は消えたたとされる煩惱の証が出現し、第七話は鹿の正体の聖が現われる。性器と聖という全く対照的なものが表

出し、連関していく。何らかの事実が明るみになったことに對して、人々は「ふしまろぶ」のだ。

### 三

次に「ふしまろぶ」が登場するのは、第一六話「尼、地藏見奉る事」である。

ある老尼が「地藏菩薩は夜明けごとに歩きなさる」という噂を信じ、彼方此方を歩き回っていた。それをみかけた博打は、尼を騙そうと「ぢざう」という名の童を紹介した。尼は童を見るとたいそう喜び伏して拝んだ。尼と「ぢざう」の遭遇の場面をあげておこう。

尼は「地藏見參らせん」とてゐたれば、親どもは心得ず、「などこの童を見んと思ふらん」と思ふ程に、十ばかりなる童の來たるを、「くは、ぢざう」といへば、尼、見るままに是非も知らずふしまろびて拝み入りて、土にうつぶしたり。童、楯を持って遊びけるままに來たりけるが、その楯して手すさびのやうに額をかけば、額より顔の上まで裂けぬ。裂けたる中よりえもいはずめでたき地藏の御顔見え給ふ。尼拝み入りてうち見あげたれば、かくて立ち給へれば、涙を流して拝み入り參らせて、やがて極樂へ參りけり。

されば心にだにも深く念じつれば、仏も見え給ふなりけりと信ずべし。

一心に地藏を拝みたいと願っていた尼が、念願の地藏（実は「ぢざう」という名の童）を拝むことができた場面に「ふしまろぶ」が登場する。

本話では、前半博打に騙される老尼の姿が描かれている。博打に騙されていることがかぬまま、「ぢざう」という名の童とができた老尼の姿から、本話はたしかに靈験譚として読まれるべきなのだろう。しかし第六話や第七話との連関から、読み手は老尼の狂信的なまでの興奮状態をどこか滑稽に感じてしまうのではないだろうか。博打のイカサマからなる本話は、単純な靈験譚の枠組みからは脱してしまっている。なお、この不可解な構造に關して、田中宗博氏は、「「信」というものの持つ力の不思議」を、読者に説明して納得させるのではなく、追体験的に悟らせるためのものであった」と評している。<sup>註11</sup>

一方で、本話は騙される愚かな老尼を描いただけではない。地藏（という名の童）に遭遇することができ、喜び「ふしまろび」した後、童の額が裂け、そこからありがたくもめでたい地藏のお顔が見えたという展開をたどる。話末では、「されば心にだにも深く

念じつれば、仏も見え給ふなりけりと信ずべし」とある。盲目的な老尼の深い信仰心は、騙されたとはいえ「ぢざう」を拝むことにつながった。田中氏が指摘するように、編者は老尼を笑う材料を読み手に与えつつ、奇瑞によつて蹴躓かせてしまうのである。

思えば、第六話、七話と人々が「ふしまろび」した後、真実が表出していた。そして本話でも、一心に信仰する老婆に報いる事実が表出するのである。

以上、「ふしまろぶ」の連関から明らかになったことを、ここまでの三話において整理しておこう。まずは、『宇治拾遺』で使われる「ふしまろぶ」に關して、『源氏』等の先行文学とは異なり「滑稽さ」を伴う語彙ではないかという点である。「ふしまろぶ」の始発である第六話は滑稽な笑話である。第七話、一六話も、笑話ではないが、「滑稽さ」を読み取ることができた。続いて、「ふしまろぶ」ことで真実が露見するという点があげられる。第六話―いかさま、第七話―無私の犠牲、第一六話―地藏といったように、隠されていた真実が表出することとなる。<sup>註12</sup>最後に「ふしまろぶ」という語は、対象の狂信さを浮き彫りにするという点である。第六話という下卑た笑話の存在が、第七、一六話の仏教説話を矮小化していく。矮小化に伴い感動的な仏教説話は、狂信的で盲目的な人々の物語へとスライドされている。聖なるものの露見により人々

は「ふしまろぶ」が、この行為により信仰心が過度に誇張され、狂信的な側面が映し出されるのである。この三つの可能性は常に裏表の関係にあるのだと考えられる。利生を受ける者は、自分にとって都合の良い願いを持っている。「ふしまろぶ」行為者は、その願いが叶えられるよう狂信的な信仰心を持つ。それは読み手にとって滑稽さを感じさせるものであるというように、三つの可能性は相関関係にあるのだ。

以上の可能性を念頭に置きつつ、次に「ふしまろぶ」が現れる第七五話を検討していこう。

#### 四

第七五話「同清仲の事」は二部構成の話である。前半部に二条の大宮での出来事、後半部に春日の祭での出来事が描かれている。まず、やや長いが本文をあげておこう。

これも今は昔、二条の大宮と申しけるは、白河院の宮、鳥羽院の御母代におはしましける。二条の大宮とぞ申しける、二条よりは北、堀川よりは東におはしましけり。その御所破れにければ、有賢大藏卿、備後国を知られける重任の功に修理しければ、宮も外へおはしましにけり。

それに陪從清仲といふ者、常に候ひけるが、宮おはしまさ

ねども、なほ、御車宿りの妻戸にゐて、古き物はいはじ、新しうしたる束柱、葎などをさへ破り焚きけり。この事を有賢鳥羽院に訴へ申しければ、清仲を召して、「宮渡らせおはしまさぬに、なほとまりゐて、古物、新物こぼち焚くなるは、いかなる事ぞ。修理する者訴へ申すなり。まづ宮もおはしまさぬに、なほ籠りゐたるは、何事によりて候ふぞ。子細を申せ」と仰せられければ、清仲申すやう、「別の事に候はず。薪に尽きて候ふなり」と申しければ、大方これ程の事、とかく仰せらるるに及ばず、「すみやかに追ひ出せ」とて、笑はせおはしましけるとかや。

この清仲は法性寺殿の御時、春日の祭乗尻に立ちけるに、神馬づかひ、おのおのさはりありて事欠けたりけるに、清仲ばかりかう勤めたりしものなれども、「事欠けにたり。相構へて勤めよ。せめて京ばかりをまれ、事なきさまに計らひ勤めよ」と仰せられけるに、「かしこまりて承りぬ」と申して、やがて社頭に参りたりければ、返す返す感じ思し召す。「いみじう勤めて候ふ」とて御馬を賜びたりければ、ふしまろび悦びて、「この定に候はば、定使を仕り候はばや」と申しけるを、仰せつく者も、候ひ合ふ者どもも、ゑつばに入りて笑ひののしりけるを、「何事ぞ」と御尋ねありければ、しかじかと申し



けるに、いみじう申したり」とぞ仰せ事ありける。

本話に関する先行研究は非常に少ない。本話に登場する陪從清仲に関しては、一二世紀前半に陪從として活躍したとされる橘清仲であるというのが定説といえるだろう。清仲は陪從猿樂の担い手であり、滑稽さを持ち合わせる人物である。本話の読みに関しては、小峯和明氏により「そこでは清仲なら何をいっても許され、すべて笑いに解消されてしまう暗黙の了解が院らはもとより当人も自認する形ですでにあり、道化的な役まわりがきわだつていて」と評されている。本稿ではこれら従来の読みを踏まえつつ、「ふしまろぶ」を中心に検討していくこととする。

前半部は、二条院での出来事が記されている。御所が破損し、修理のため二条の大宮は御所にいなかった。大宮不在の中、陪從清仲は古い物はもちろん新しい物まで焚いてしまうのだった。石田豊氏はこれに関して「清仲の大それた行為が比較的容認されていた背景には二条大宮（令子）との主従関係によるところが大きくかったのではないかと述べたが、もう一方では陪從猿樂者としての清仲の存在が周囲に知れ渡っていたであろうこともその要因の一つに加えることができよう」と指摘している。清仲の行為は二条大宮との関係や猿樂者としての立場から、寛大に受け止められたようである。

自身の行為をとがめる鳥羽院とのやりとりの中で、清仲は「別の事に候はず。たき木につきて候也」と述べている。この清仲の答弁は、薪に不自由しているためであると取ることができるが、新大系では「建物の材を薪に見立て、宮は不在であるが、これについて候しているとおどけたものか、新全集では「薪に不自由しているからであります」と解釈が分かれている。この点について、本稿では「たき木につきて」という表現に注目したい。仏語に「たきぎ注17尽く」という語があり、法華經の序品で使用されている。清仲は目の前の薪をみて、經典の知識とかけおどけてみせたのではないか。

続く後半部に「ふしまろぶ」は登場する。前述の通り、これまでの話では狂信性や滑稽さ、真実の露見といった性格が「ふしまろぶ」から導き出されていたが、今回はどうか。

馬を賜った清仲は「ふしまろび」喜び、「この定に候はば、定使を任り候はばや」と発言して周囲を笑わせる。清仲の発言に関して、「ぢやう」の音の重なり以外での笑い所はどこにあるのだろうか。先行研究において、清仲の発言の笑い所に関する指摘は殆どみられなかった。本話は笑い所の不透明さから、読みの困難な話として扱われてきたように思われる。

この問題に関し、野本東生氏は、「ゑつばに入る」という表現を、



笑いに値しないものに対する笑いであるとして、「この笑いはむしろ物言いのおかしさにはないと考えられないだろうか。「ふしまろぶ」という所作を伴っているからこそ、そこに笑いが生じるのであり、「この定に候はば、定使を仕り候はばや」はそのきつかけに過ぎないのでないだろうか」と指摘している。周囲の人々が感じた滑稽さは、「ふしまろぶ」清仲の行為自体にあるのだという。

つまり本話の「ふしまろぶ」は感情の自発的な誇張的表現ではなく、最初から誇張を意図した「演技的」な動作表現であると考へたい。馬を賜った喜びの感情を、身体を用いて誇張的に表現している。たいして面白くもない清仲の発言は、「ふしまろぶ」ことで、周囲に笑いをもたらしている。清仲が滑稽さを演ずる猿楽者として認知されていたことも要因となり、人々は笑ったのである。

## 五

本節は第一〇八話「越前敦賀の女、観音助け給ふ事」について、読みを検討するものである。まず、大まかなあらすじをあげておこう。

越前敦賀に住む女がいた。両親は女を大事に育て、結婚相手を見つけたが、長続きしない。困り果てた両親は、家の後ろに堂を建て、観音に女の将来を祈った。その後両親は亡くなり、女一人

となった。貧しくなった女は、観音に今後を祈る日々であった。ある時、堂から年老いた僧が夢に現われ、「気の毒だから男と逢わせてあげよう。明日来る男に従いなさい」と告げる。女は信じて観音に祈った。

次の日、旅人達が家を訪れ、宿にするといったが、貧しい女はもてなせずいた。夜が更けると、旅人達の主人が女の元を訪れる。主人の男はやもめだったが、女が元妻に似ており、手に入れようとする。さらに男は、用事のためこの家を離れるが、家来を残しまた戻ると約束し去って行った。残された家来をもてなすにも貧しく、女が嘆いていたところ亡き両親に仕えていたという娘が現われる。娘のおかげで無事家来をもてなすことができ、やがて男も戻ってくる。男は女を連れて行くといい、夢での仏のお告げも「身をゆだねよ」というものであったため、従い行くこととなる。出立前に例の娘に謝礼をと思い、紅の生絹の袴を与えた。この場面の後、「ふしまろぶ」が登場する。以下、本文をあげる。

鳥鳴きぬれば、急ぎ立ちて、この女のし置きたる物食ひなどして、馬に鞍置き、引き出して、乗せんとする程に、「人の命知らねば、また拌み奉らぬやうもぞある」とて、旅装束しながら手洗ひて、後ろの堂に参りて、観音を拌み奉らんとて見奉るに、観音の御肩に赤き物かかりたり。あやしと思ひて

見れば、この女に取らせし袴なりけり。「こはいかに、この女と思ひつるは、さは、この観音のせさせ給ふなりけり」と思ふに、涙の雨雫と降りて、忍ぶとすれど、ふしまろび泣く気色を男聞きつけて、あやしと思ひて走り来て、「何事ぞ」と問ふに、泣くさまおぼるけならず。「いかなる事のあるぞ」とて見まはずに、観音の御肩に赤き袴かかりたり。これを見るに、「いかなる事にかあらん」とて有様を問へば、この女の思ひもかけず来て、しつる有様をこまかに語りて、「それに取らずと思ひつる袴の、この観音の御肩にかかりたるぞ」といひもやらず、声を立てて泣けば、男も空寝して聞きしに、女に取らせつる袴にこそあんなれと思ふがかなしくて、同じやうに泣く。郎等どもも物の心知りたるは、手を搾り泣きけり。かくてたて納め奉りて、美濃へ越えにけり。

娘に紅の袴を与えた次<sup>注19</sup>の日、女は出立する前に家の堂の観音を拝もうとする。すると観音の肩には、赤い袴がかかっていた。女はそこで自分を助けてくれた娘が、観音であったことを知る。女は観音の行いに「ふしまろび」泣き、男もまたともに泣くのであった。

第一〇八話は、新全集によると、「当初は越前敦賀の観音縁起譚として語り出されたものらしい屈指の観音利生話」とあり、類型

的な観音利生譚であることが指摘されている。第一六話と同様に、信仰に報いる形で利生がもたらされる話である。本話には同文的同話である『今昔』巻二六第七話「越前国敦賀女蒙観音利益語」が存在する。内容はほぼ同一のものであるが、細かな差異が見受けられるため、両者を比較し本話の性格について論じていきたい。

『宇治拾遺』では、『今昔』に比べて、所々詳細に記述される箇所や削除されている箇所が存在する。まず、登場人物の設定に微妙な差異が見られる。『宇治拾遺』において旅人の男は、「猛将」の一人息子とされている。しかし『今昔』の「勢徳有ケル者」の一人息子という設定の方が本話にふさわしく、諸注釈もそのように指摘している。「猛将」という語は『宇治拾遺』の中で、唯一本話のみ使用されている。つまり、編者が意図して使用した語と考えられる。権勢のある者ではなく、「殺生」をした者の息子という人物設定は、本話に仏教説話からはみ出す暴力性をただよわせている。男は女と異なり、観音の利益から最も遠い存在とも考えられよう。

続いて、旅人の男の亡くなった妻に対する思いについて、『宇治拾遺』では削除されている箇所がある。<sup>注20</sup>また、使用人の娘の設定も『今昔』にはなく、御厨子所に仕えていた女の娘であるということが付け足されている。御厨子所という関連で考えると、追加

されている叙述の多くは食べるものがないという女の困窮を示すものであると思われる。<sup>註</sup>

また、女が「ふしまろぶ」とき、男は「走り」来て、見ると、「泣く女のさまおぼろげならず」とある。この「走る」と「泣く女のさまおぼろげならず」は、いずれも『今昔』にはない、『宇治拾遺』独自の表現である。まず、「泣く女のさまおぼろげならず」からは、女の「ふしまろび」、泣く様が、いかに尋常ではないかが読み取れるだろう。加えて、「走る」男について、古典での「走る」行為の異常性については、稲田利徳氏により指摘がある。<sup>註</sup>これらの表現からは、女の狂信的なまでの感動の様子をより明確に伝えようとする筆の意匠が読み取れるのではあるまいか。

本話は、女の困窮ぶりを詳細に記すことで、観音の利益を違和感なく描き、読み手を「仏教説話」の枠組みへと誘う。しかし「猛将」の息子である男が「走り」、狂信的な女が「ふしまろぶ」点に注目すると、騒然とした雰囲気の中に滑稽さもうかがえるのではないだろうか。

## 六

第一一三話「博打の子、聾人の事」は、博打一党の策略の中で「ふしまろぶ」が使用される。本話は、「ふしまろぶ」の連関にお

ける終結部に位置している。第六話からはじまるこの連関は、かくも離れた話同士を有機的に結合している。

醜い博打の子を長者の娘に婿入りさせるため、鬼の仕業で醜い顔になってしまったという一芝居を打つ。まず、第一〇八話と同様、結婚の話であり、前話が結婚できない女、本話が結婚できない男という対照が指摘できよう。そして、本話では鬼に襲われる演技の中で、博打の子が「ふしまろぶ」こととなる。

聾、「いかがいらふべき」といふに、舅、姑、「何ぞの御かたちぞ。命だにおはせば。『ただかたちを』とのたまへ」といへば、教へのごとくいふに、鬼、「さらば吸ふ吸ふ」といふ時に、聾顔を抱へて、「あらあら」といひてふしまろぶ。鬼はあよび帰りぬ。

博打というと、第一六話で老尼を騙す存在として登場した。連想の糸は、ここでも離れた二話をつなぎ、連関している。

本話で使用されている「ふしまろぶ」は、感情の誇張的表現ではなく、意図的な動作として使用されている。鬼に襲われ苦しむ演技の動作として「ふしまろぶ」のである。第七五話でも見られた「演技性」は、ここでは、真実を誤魔化すためのものとして機能している。

加えて、博打の子が「ふしまろぶ」と「鬼の仕業で醜くなって

しまった」という「真実」が現われる。ここでも男の願いに報いるようなかたちで、都合の良い「真実」が露見するのだ。

また、前述の通り「ふしまろぶ」の帰結である本話は、結婚にまつわる話である。男性器が表出する「俗」な第六話から始まり、結婚という男女の話である本話で帰結することは非常に興味深い。全体を通じて「聖」と「俗」、「信じる」と「騙す」といった対照的なテーマが流れていることも指摘しておきたい。

## 七

以上、『宇治拾遺』において「ふしまろぶ」が使用される話に関して論及してきた。最後に各話の連関について、改めて整理していきたい。

第六話と七話は「聖」つながりであり、明確な連関が読み取れる。第六話は、非常に印象的な性にまつわる笑話であり、読み手は以下、この話を脳裏に浮かべながら読み進めていくこととなる。隣接する第七話は、特に第六話の影響を受け、単なる仏教説話として読まれることを拒否する。功德に打たれた男の信仰心を「ふしまろぶ」ことによって、誇張的に表現している。

第一六話では、地藏を拝み入る老尼の様子を「ふしまろぶ」で表現している。ここでは老尼の他に博打や童が登場するが、老尼

だけが「ふしまろび」ているため、周囲との温度差が感じられる。「ふしまろぶ」状況により、第一六話では老尼の狂信性が強調される。

第七五話では、猿楽者の清仲が「ふしまろび」大げさに喜んだという内容である。ここでは、清仲の喜びの感情が誇張的に表現されたのではなく、猿楽者として場に笑いをもたらす意図的な行為として「ふしまろぶ」が使用されたと考えられる。

第一〇八話は、観音の利益に対する感動の様子が「ふしまろぶ」で表現されている。第一六話同様に、宗教的熱狂の様が描かれている。特に本話は、観音の利益に対して、男と女があわただしく反応することで、場の騒然とした雰囲気からは滑稽さも感じられるよう。

第一一三話では、演技の動作として「ふしまろぶ」が使用されている。第六話から誇張的表現として使用されてきた「ふしまろぶ」は、第七五話で意図的な演技の動作として使用されるようになり、第一一三話では完全に演技の動作として用いられている。

各話の検討から、『宇治拾遺』の「ふしまろぶ」の語の機能として、(a)「真実の露見」(b)「滑稽さ」(c)「狂信性」(d)「演技」が指摘できるだろう。

まず(a)「真実の露見」に関して、第六話「性器」、第七話

「聖」、第一六話「地藏」、第一〇八話「観音」、第一一三話「醜い顔」があげられる。ここでは、単純に秘されていた「真実」が露見する場合や、「ふしまろぶ」行為者にとって都合の良いものが「真実」となり露見にいたる場合がある。<sup>注5</sup>

(b) 「滑稽さ」に関して、連関の中で最も滑稽で印象的な話は、始発である第六話である。性に纏わる下卑た笑話の第六話は印象的であるため、隣接する第七話の猟師の感動の様子もどこか滑稽に感じられよう。続く第一六話でも、博打に「騙される」尼の感動が滑稽に描かれるが、第一一三話は博打と共に「騙す」狸の滑稽な演技が描かれている。

(c) 「狂信性」に関して、理性を失いひたすら聖や仏を信じる様子は、第七話、一六話、第一〇八話にみられる。

(d) 「演技性」に関して、第七五話において清仲は猿楽者として場に笑いをもたらすための「演技」として「ふしまろび」ののだと考えられる。「ふしまろぶ」は第六話、七話、一六話では感情の誇張的表現として使用されていたが、第七五話では笑いを場にもたらず演技的動作へとかわり、第一一三話では最終的に、完全に演技の動作となっている。

「演技」という性格から、この連関を読み返してみると、第六話ではイカサマな聖が登場していた。冒頭でも触れたがこの聖は、

元々「ウソを職業としている法師である」<sup>注24</sup>との指摘がある。聖は煩惱を断ちきつたという「演技」をしていたのだとすると、「ふしまろぶ」という行動も、その場から逃げおおせるためのごまかしの「演技」とも考えられよう。「ふしまろぶ」の語脈によって、第七五、一一三話を読んだ読み手は、第六話の読みの変更をせまられることとなる。また、終結に向かう連関は、荒木浩氏の「宇治拾遺物語」の時間は、終末へと確実に進行し、(中略) 相対する価値の拮抗を繰り返しながら、徐々に「下」れる有り様を露呈していた<sup>注25</sup>との指摘に結びつけて考えることも許されよう。イカサマ・ごまかしという「演技」的な動作へと確実に進行しているのだ。

以上、「ふしまろぶ」の各話の連関から四つの性格を見出すことができた。読み手はこれらの要素に引きずられつつ、次第に読むのではなく、幾度となく立ち戻り、繰り返し読むことを物語から要請されるのである。

### おわりに

以上、本稿は前掲荒木氏の論を試行する立場に立ち、「ふしまろぶ」という語彙に注目して、新たな読みの可能性を検討してきた。「ふしまろぶ」の連関において、「真実の露見」「滑稽さ」「狂信性」「演技性」といった性格が抽出できた。これらの性格を『宇治

拾遺』全体においてどのように検討すべきか、他の語彙における連関はどのようなものがあるのか等、論じ残した問題は多いが、それらについては改めて後考を期したい。

注

注1 「中世風刺家のおもかげ―『宇治拾遺物語』の作者」（『文学』）昭和四一年（二月号）

注2 小出素子「『宇治拾遺物語』における説話配列について―全巻にわたる連関表示の試み―」（『平安文学研究』第六七輯、昭和五七年）、西尾光一「『宇治拾遺物語』における連纂の文学」（『清泉女子大学紀要』第三二号、昭和五八年）など。

注3 荒木浩「（次第不同）の物語―宇治拾遺物語の世界―」（『説話論集』第一集（清文堂、平成三年）、後に『説話集の構想と意匠』（勉誠出版、平成二四年）に収載）

注4 荒木氏注3論文。

注5 『日本国語大辞典』（小学館、平成一八年）

注6 『源氏』では「なごりだになくあさましきことと、宮はふしまろびたまへどかひなし。（夕霧）」などの使用例がある。これは御息所の葬儀の場面であり、落葉の宮の深い嘆きが読み取れる。他の用例に關しても、葬儀や出家の場面で使用されており、一貫して悲嘆の身体的表現であると考えられる。

注7 喜ぶパターンとして、巻五第二「地ニ臥シ丸ビテ喜ブ事無限シ」、巻

五第二十七「本ノ象ノ前ニシテ臥シ丸ビテ喜ブ事無限シ」、弥ヨ喜テ臥シ転ブ事無限シ」、悲しむパターンとして、巻十第二十二「地ニ臥シ丸ビテ泣ク事無限シ」、巻十二第三十四「臥シ丸ビ泣ク事無限シ」、巻十五第五「長増ガ前ニシテ臥シ丸ビ泣ク事無限シ」、巻十五第二十三「臥シ丸ビ涙ヲ流シテ泣ケリ」、巻十六第七「涙ヲ流シテ臥シ丸ビ泣クヲ」、巻十九第十四「皆臥シ丸ビ泣ク事無限シ」、『臥シ丸ビ泣ク事無限シ』、巻十九第二十六「將ノ前ノ庭ニシテ臥シ丸ビ泣ク事無限シ」、巻二十六第五「其二テモ介臥シ丸ビ泣ク」、巻二十九第十七「只臥シ丸ビテ音ヲ拳テ泣叫ブ」、巻三十第七「臥シ丸ビ泣迷フ」以上十四例が挙げられる。他三例は単に「ころがり伏す」動作としての使用であると考えられる。

注8

『源氏』における使用例の多くは、浮舟周辺の人物が動作主となっている。対して、源氏周辺の人物は「ふしまろぶ」ことがない。

注9

田口和夫氏は「中世的人間像―宇治拾遺物語「狂惑の法師」の解釈から―」（『説話』一号、昭和四三年六月）において、「狂惑」という語に着目し、「狂惑」を「誑惑」と解釈し、ウソを職業としている法師であると指摘している。

注10

田口和夫「『宇治拾遺物語』「竜門聖」説話と照射鏡―『古事談』「舜見上人」の由来―」（『説話』八号、昭和六三年六月）

注11

田中宗博「地蔵に遇った尼のこと―『宇治拾遺物語』第五話をめぐって―」（『人文学論集』第九・一〇集、大阪府立大学人文学会、平成三年三月）

注12 後述する通り、ここで表出する真実について、始発の第六話が俗なものであるの対して、続く第七、一六話が聖なるものであることは非常に興味深い。

注13 陪從清仲に関して、谷口耕一氏や山岡敬和氏により一二世紀に陪從として記録のある橘清仲とする説が提唱されている。

注14 小峯和明『宇治拾遺物語の表現時空』（若草書房、平成十一年）

注15 石田豊『陪從清仲』考―『宇治拾遺物語』第七五話の人物の考察―

（『二松学舎大学人文論叢』六八号、平成十四年一月）

注16 伊東玉美氏は『宇治拾遺物語の楽しみ方』（新典社、平成二二年）

において、新大系の「薪に祇候している」という解釈が優勢であるとした上で、新全集の「薪が尽きてしまった」という解釈も再考の余地があるとして支持するなど、今なお決着がみえない。

注17 「たきが燃えてなくなる意から）1 仏語。釈迦の入滅をいう。2 転じて、人の死ぬことをいう。寿命が尽きる」『日本国語大辞典』

（小学館、平成一八年）

注18 野本東生「宇治拾遺物語の清仲・武正一許された者の話」、『中央

大学文学部紀要 言語・文学・文化』第二五四巻／第一一五号、平成二七年三月）

注19 女が礼として娘に与えた「紅なる生絹の袴」は観音の肩にかかり返ってくる。このため女は観音の行いに気がつくこととなる。一方、第一六話には、地藏を拝むために老尼が博打に「紬の衣」を渡す場面がある。老尼は衣服を騙しとられているが、その後地藏を拝むこと

となる。衣服という観点での連関も読み取れるか。

注20 『今昔』では「心指シ深く思タリケル妻」「只失ニシ妻ノ有様ニ露遣フ事無カリケリ」と亡き妻への執着ともとれる表記が存在するが、『宇治拾遺』では削除されている。

注21 『宇治拾遺』で描かれる女の困窮の様子は、「敷くべき筵だになかりけり」等繰り返し描写されている。女の貧窮ぶりを強調することで、使用人の娘の唐突な出現は展開上、都合よく受け止められている。

また、御厨子所に仕えていた女の娘という過去の繋がりや付与することで、客人を饗応するという出来事も不自然なく読み進められる。

注22 稲田利徳氏は、『人が走るとき 古典のなかの日本人と言葉』（笠間書院、平成二二年）において、とりわけ中世においては「人が走る」ことは、行為者を狂人とみなしたり、滑稽さを催すものとして受け止められていたと闡明している。

注23 第六話「性器」や第七話「聖」の露見は、秘されていた「真実」の露見であると考えられる。しかし第一六話「地藏」や第一〇八話「観音」や第一一三話「醜い顔」の露見は、「ふしまろぶ」行為者の願いに応じた都合のよい「真実」の露見ではないか。

注24 田口氏注9論文。

注25 荒木浩「宇治拾遺物語の時間」（『中世文学』第三三号、昭和六三年）（すがわら さやか 博士前期課程在籍）



